

国分寺中学校区

【目指す子ども像】 ○学び合い高め合う子ども ○主体的に人や社会に関わる子ども 【実践研究課題】 「学び合いを支える コミュニケーション能力の育成」 ～算数・数学科を中心に～

各部会の取組

＜学習指導部会授業研究チーム＞

【児童生徒の実態】 一般に中一ギャップとよばれる、中学校のカリキュラムについていけない生徒や各小学校の慣習の違いにより戸惑っている生徒が見られる。その原因として、中学校区内3校の教員のほとんどが、互いに日常の授業の様子を参観する機会がなく、小中学校それぞれの実態や問題点が共有されていないことが考えられる。 【部会のねらい】 2つの小学校間や異なる校種である小中学校間で、教職員が互いの児童・生徒や指導の様子を参観したり、授業研究を通して共感的に理解し合ったりすることで、小中一貫教育の推進を図る。
--

視点	<A> 教育課程の工夫改善	 教育活動の連続性の確保	<C> 教職員間の連続・協働	<D> 家庭・地域との連携・協力
----	-------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	----------------------------------

取組	小中学校の授業公開やビデオの視聴で、各校の共通点や相違点を共有し、相互理解を図る。また、各部会の取組の視点に基づき、授業での児童生徒の実態を理解する。
成果	授業公開と研究会を通して、各校の教職員の交流が深まった。参考になることを取り入れたいという意見が多かった。マトリックスシートを用い、付箋紙を貼りながら行った授業研究により、3校の違いや共通点を共有することができた。また、小中学校で一貫して指導していくことの良さや、成長段階に合わせて指導していくことの必要性などを、参観を通して実感することができた。授業ごとの研究会であるため、他教科の意見を知ることができない点については、係がまとめた「教科ごとの授業研究会で出た意見」を読むことで、各自が理解を深めることができた。
課題	現在教えている内容の系統性が分からないという意見も出ていた。今後、教科ごとに小学校と中学校で年間指導計画の作成を行ったり、共通する単元ごとにどの部分を重点的に学ばせるか、どのような方法を用いたら良いかなどの共通理解をしたりすることが必要になってくると思われる。乗り入れ授業に関しても、異校種間の先生方の関わり方や授業実践の仕方が、今後の検討課題である。

＜学習指導部会学力向上チーム＞

【児童生徒の実態】 とちぎっ子学習状況調査より、文章題や式を工夫して解くような問題の正答率が県の平均よりも低い傾向にある。また、中学校に入学して文字式が出てきたときにつまずく生徒も少なくない。和や差、積等の計算はできるが、それを活用することに課題がみられる。 【部会のねらい】 昨年度、「式の意味を、イメージや体験と結び付けて理解させる」ことをねらいとして9年間を見通した授業改善の取組を提案した。今年度はその提案の中から「算数、数学的な表現の仕方を理解させる」ことを重点として、小中学校の授業を参観し、生徒の様子からより具体的なつまずきなどを見付け、基礎学力の定着とともに授業の改善方法を協議し、学力向上を目指す。

視点	<A> 教育課程の工夫改善	 教育活動の連続性の確保	<C> 教職員間の連続・協働	<D> 家庭・地域との連携・協力
----	-------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	----------------------------------

取組	算数・数学的な表現の仕方を理解させるために、研究授業や、日々の授業の様子から具体的なつまずきを見付け、補強していく授業づくりについて話し合い、実践を繰り返し、具体的な手立てを作成する。
成果	小学校と中学校が、お互いの授業の形態を知ることができた。また、それぞれの発達段階にを踏まえた授業のポイントを考えることができ、学習のつながりを共有できた。
課題	学力向上部会としてのねらいを明確にしなければならない。授業を参観し、改善点についてもっと協議を重ねることが重要である。また、児童・生徒の学力が向上したかを判断する評価規準を決める必要がある。



<児童・生徒指導部会>

【児童生徒の実態】

基本的な生活習慣が身に付いている児童・生徒が多い。
全体的に、考え方や行動がやや幼い傾向がある。

【部会のねらい】

時と場に応じたあいさつや返事の仕方、お互いの話の聞き方、伝え方などを指導し、児童・生徒のコミュニケーション能力の育成を目指す。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
取組	中学生による小学校へのあいさつ運動交流を通し、児童・生徒のコミュニケーション能力の基礎を育むとともに、互いの学校への理解を深める機会とする。また、子ども未来プロジェクトによる清掃活動交流を活用し、清掃活動を通じた異学年のコミュニケーションの場を設ける。これらの活動後にはアンケートを行い、児童生徒の意識の変容などを見取る。			
成果	中学生による小学校へのあいさつ運動交流や、子ども未来プロジェクトによる清掃活動交流を行い、事後のアンケートや児童・生徒の様子から、活動を通して相手に伝える力、相手から学ぶ力、人から学んだ事を他へ伝える力などの向上が見られた。特に、中学生が小学生の高さまで目線を下げてあいさつをしたり、寸劇で小学生に清掃のやり方を教えたりするなど、伝えるための工夫が見られた。			
課題	あいさつ運動交流では、体の大きい中学生が大きな声であいさつをすることで、小学生を驚かせてしまう場面もあり、事前にどのようなあいさつをしたらよいかを考えさせる必要がある。また小学生の間でも急速にインターネットを介したコミュニケーションが行われる世の中になっていることを踏まえ、SNSやオンラインゲーム等に関わる活動も、来年度以降検討していきたい。			

<健康安全指導部会>

【児童生徒の実態】

基本的な生活習慣は家庭での差が見られるもののおおむね定着している。自己肯定感の低さや、健康管理面で他律的な様子が見られ、自己管理能力の育成が必要である。

【部会のねらい】

心身共に健康で、自分を大切に子どもを育む指導の在り方

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
取組	本年度の課題である『歯と口の健康』における各学校の実態を把握し、健康課題を明確にする。健康課題解決のための具体策を学校保健計画に位置付け、保健教育を計画通りに実施することで、処置率向上や児童・生徒の口腔環境改善への意識とスキルの向上を図る。また、昨年同様、長期休業明けに生活習慣チェックを実施し、生活習慣の改善を促す。 栄養教諭の協力を得て、小学生から中学生まで系統的に食に関する授業を行い、食に関する興味関心をもたせるとともに、栄養と健康との関係、毎日の食事作りについての知識を深める。			
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・各科受診勧告の回数を増やしたところ、受診率が上昇した。(歯科受診率 平成30年度66.3%→令和元年度69.2%) ・地域の関係機関と連携したりICTを活用したりして、歯と口腔の健康づくりの学習をしたところ、意識と習慣の向上が図れた。また、それらを学校保健委員会の協議内容に設定し、地域・保護者・学校医と口腔環境の現状や取組を共有できた。 ・生活習慣の見直しをチェックカードを用いて実施したところ、児童生徒が9月と1月の自身の生活習慣を比較し、課題を具体的につかみ、改善に向けて意識が向上し、行動する様子が見られた。また、保護者においてもチェックカードの記入から、朝食の内容・就寝時間・排便習慣について振り返るコメントが多く、意識の変容が見られた。 ・食に関しての意識が高まった。児童からは「野菜をがんばって食べたい」「3つのスイッチを守って食べたい」「嫌いなものも半分は食べたい」などの感想が出た。保護者からも「授業で学んだことを家で一生懸命説明してくれ。苦手な野菜を出しても、野菜と仲良くなるんだと言って、がんばって食べるようになった。」との声があり、授業が効果的であったことがわかる。 			
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・未受診の保護者に対する有効な働きかけを検討する。 ・歯科指導の充実を図るため、指導内容の系統性を高める。特にICTの活用を進め、視覚効果の高い指導を検討する。 ・継続した取組につなげるために、更なる教職員への理解と連携を図り、細やかな支援を行う。 ・朝食欠食傾向のある児童生徒や、就寝時間が十分に確保出来ていない児童生徒へどのような働きかけが有効か検討する。 ・食に関する授業に関して、今年度の取組を今後も続けていく。 			

成果と課題

◎成果

- ・小中学校の教員がそれぞれ、お互いの授業を見合い、理解し合うことを今年度の大きな目的として、小中一貫の日に授業公開を行った。授業を参観して、児童生徒の様子を見ることができ、成長段階やそれぞれの学校の特徴を知ることができた。また、教員同士が交流し互いを知ることができたことも大きな成果であった。
- ・児童生徒指導部会では、今年度新たに、中学生が学級ごとに小学校に行くあいさつ運動を実施した。また、清掃活動交流も行き、相手の目線で考えること、伝えることの大切さなど、コミュニケーション能力を高めることにつながった。
- ・健康安全部会では、栄養面、保健面の両方において小中学校をつなぐことができた。保健だよりの配布や学校保健委員会への生徒の参加、栄養教諭や校医などとの連携により、児童・生徒の意識も向上してきている。
- ・全体として、小中一貫教育の取組を行うことによって、プラスになる面が見えてきている。

●課題

- ・教員の乗り入れ授業を行っていくことは、小中学校をつなぐ上でとても有効であるが、持ち時数の問題や専門性、教員の意識等、課題となる面が多く、工夫や改善が必要である。
- ・先生方の異動や担当の変更により、前年度とうまくつなげられなかった部分もあるため、部会のもち方や小中一貫の日の時間の使い方を工夫する必要がある。教職員の意見を取り入れながら、改善していきたい。